



アルファ・クリーピング・ベントグラスの育成と管理

ダグ・ブリード(Doug Brede)博士(アルファ・ベントグラス開発者)



概要

ゴルフ場というものはそれぞれが特殊な存在である。アルファ・クリーピング・ベントグラスは優れた品種であり、その育成管理の最初の手引きとなるべく、開発者である筆者は以下のようなガイドラインを作成した。このガイドラインは、品種改良された芝草の管理についての基礎を網羅するものであるが、一部にやや高度な内容も含んでいる。ただし、アルファは比較的柔軟な対応性を持っている品種であり、さまざまな管理手法に適応する芝草であるから、ガイドラインに盛り込まれたすべてを実行しなければならないというものではないことをあらかじめお断りしておく。どのような場合であっても、農学的見地からみて健全な判断をおこなえば、最高のターフが出来上がるものである。

初期育成

播種のタイミング

ベントグラスの種子は地温が温かい(15°C超)時には即座に発芽を開始する。非常に温かい(気温が27°Cを超える)状態の時に播種を行うと、ベントグラス種子は急速に発芽するが、その場合、苗立ち枯れ病を引き起こすさまざまな菌類からの保護が必要となる可能性がある。発芽前の状態の種子を保護するために、殺菌剤で種子をコーティングしておくことが可能である。ほとんどの場合は、発芽後に殺菌剤を上から散布するという方法で十分であろう。

土壤がスズメノカタビラの種子を含んでいる場合には、地温が温かい時期に播種を行うのがベストである。27°C超という条件下では、スズメノカタビラはほとんど発芽しないので、ベントグラスにとって有利になる。

もっと冷涼な時期に播種を行うことも可能であるが、その場合、発芽までに30日間ないしはそれ以上の日数を要するだろう。そしてその間、土壤の表面が浸食されてしまう恐れがある。例えば、8月の初めに播種を行った場合、翌年の6月にはプレー可能なグリーンに仕上げることが可能であるが、播種が9月まで延びた場合(北米地域)、プレー可能なグリーンになるまでに丸一年を要する可能性がある。

亜熱帯地区では、春に播種を行うと苗の夏越しに苦勞する可能性がある。不可能ではないが、散水と殺菌剤の使用に熟練を必要とする。春の播種は、プレー可能な状態になるまでに必要な時間が長くなる可能性があるという欠点もある。

発芽率

アルファは発芽率の高い品種である。大学における各種試験によれば、その発芽率はベントグラスの各種品種の82%と同程度またはそれ以上である。ただし、アルファは、ペンクロスやシーサイドなどに比較して

縦方向の成長が遅いという特徴があるため、初期育成期間中に伸びが遅いという印象を持たれる場合があるが、これは正常なことである。

スーパーインテントの経験:

「アルファの発芽は速い。発芽むらもなかった。4～5日で芽が出てきた。」－（オハイオ州クリーブランド近郊、サンドリッジCC、ジム・ローニー）

「アルファは活着が速いし、密度も高く、縦にしっかりときれいにボールを支えてくれる。ウチでは練習場のティーにこの草を使ったが実によかった。」（ニューヨーク州ホワイトプレーン、メトロポリスCC、トニー・グラッソ）「色、ボールのセットアップ、病害耐性、いずれもいい。メンバーは一年を通じて良かったと喜んでいる。」

播種率

アルファの最適播種率は、 $3.7\text{-}7.5\text{ g/m}^2$ である。この上限値（ 7.5 g/m^2 ）を超える量を蒔いても、発芽率が上がるわけではないし、また、早く開業できるようになるわけでもない。逆に、苗が過密になって十分な成長ができず、むしろ開業日を遅らせてしまう可能性がある。播種量を多くしすぎるとストレスに弱いターフになるだけでなく、苗の立ち枯れが発生しやすくなる。

初期生育時の施肥

播種の前に土壌分析を行い、分析結果を見てから初期育成を開始するようにすること。土壌分析報告書に従って基本的な栄養素（P, K, Mg）および土壌 pH の補正を行う。基本的に N や Ca の補正は行わない方がよく、土壌 pH は 8.5 未満に調整するべきである。

元肥は、バランスのよい 1-1-1（N, P_2O_5 , K_2O ； 例として10-10-10または 16-16-16）を使用する。施肥のタイミングは、播種の直前、播種と同時、または播種後1週間以内がよい。実効チッソ（N）として $3.8\text{~}7.5\text{ g N/m}^2$ となる量を投与する。16-16-16 を使用する場合は実際の散布量は実際の製品として、 $22.7\text{~}45.4\text{ g N/m}^2$ となる。農業用の肥料を使用する場合には肥料焼けの危険を避けるために推奨範囲内で少量を散布するようにする。

もし土壌中のカリウムの量が十分な場合には、4-5-1を使用するというのもよい。リン酸一アンモニウム（リン酸モノアンモニウム）ベースの肥料を使用するとチッソの有効化が速く、また塩害も起こしにくい。

徐放性のチッソ成分を含む肥料を好むスーパーインテントも存在する。ただし、リン成分は過リン酸ベースのものを使用しないようにしたい。その理由は、過リン酸はリンの放出速度が遅いため、苗の要求を十分に満たせないからである。また、原則論であるが、自分は成功経験があるから大丈夫というのでない限り、液肥を元肥として使用するのは避けるのがよい。

発芽から4～6週間目までの施肥

5日ごとに即効性の 1-1-1 肥料を投与する（ $1.5\text{-}2.5\text{ g N/m}^2$ ）。散布後は直ちに散水を実施する。別法として、6-1-6 肥料を徐放性のチッソ肥料と組み合わせて使用するのもよい。

ファーティゲーション（散水装置からの散水に液体肥料を混入する方法）を行う場合の投入量は、1.5-2.5 g N/m² となるように調整し、毎週または隔週に散布する。

冷涼な時期には、チッソ成分として硫酸を使用してもよい。硫酸の使用は病害防除にも役立つ。

砂地で初期育成を行う場合には、発芽後2または3週間から微量栄養素の葉面散布を開始する必要があるが出てくるのが普通である。

スーパーインテントの経験:以下の情報は、ラスベガスのレッドロックCCにおいてアルファの初期育成を行ったスーパーインテントの記録からの抜粋である。

「新グリーンの記録（使用した肥料はすべて Scotts R-8）

2004年4月 27 - 元肥投入

- ミルオーガナイト（3袋）、8-30-15（1袋）、0-0-50 セッティング J (1 方向)

2004年4月27日

- グリーンに播種
- 朝 5 から夜 8 時まで、1時間ごとに3分間の散水を実施

2004年5月1日

- 種子が膨張。表面に薄く毛が見える

2004年5月2日

- 発芽を開始する種子が見られる

2004年5月8日

- 初回の施肥を行う
- 10-4-16 セッティング M (1方向) 3/4 ポンド (3.4g/m²) N, 0-0-50 セッティング D1/2 (1 方向) 1ポンド (4.5g/m²) K
- 散水パターンを、毎時3分間から2時間ごと5分間に削減

2004年5月11日

- 施肥、10-4-16 セッティング M (1方向) 3/4 ポンド (340g) N, 0-0-50 セッティング D1/2 (1 方向) 1ポンド (450g)

2004年5月13日

- 初回の刈り込み@0.375 (9.5mm)

2004年5月14日

- 二回目の刈り込み@ 0.300 (7.6mm)
- 施肥、10-4-16 セッティング M (1方向) 3/4 ポンド (340g) N, 8-30-15 セッティング K (1方向) 1ポンド (450g) P, 0-0-50 セッティング D1/2 (1方向) 1ポンド (450g) K

2004年5月16日

- 再度の刈り込み@0.300 (7.6mm)

2004年5月17日

- 施肥、10-4-16 セッティング M (1方向) 3/4 ポンド (340g) N, 8-30-15 セッティング K (1方向) 1ポンド (450g) P, 0-0-50 セッティング D1/2 (1方向) 1ポンド (450g) K

2004年5月18日

- 再度の刈り込み@0.300 (7.6mm)
- 散水パターンを、2時間ごと5分間から2時間ごと4分と3分に削減

2004年5月20日

- 刈り込み @ 0.250 (6.4mm)
- 目土散布 (砂のみ)
- グリーン用ローラで転圧

初期育成中の施肥

活着期間中の施肥は、培地が純粋な砂なのか、USGA仕様の砂質培地なのか、通常土壌なのかによって異なる。砂の割合が高い土壌であるほど少量多回数の施肥が必要であり、年間の総量もやや多くなる。

発芽から4～6週間後、あるいは土壌がほぼ100%芝草でおおわれるようになった時点で、生育初期の施肥パターンから活着過程の施肥への切り替えを行う。アルファの場合、土壌が完全に芝草でおおわれるようになった頃から N の投与量を減らすことが重要である。施肥は日数を基準とする方法から、芝草の要求度に応じて与える方法に切り替える（下の「管理」の項を参照のこと）。結果として 8-10 ポンドN/1000 ft² (40-50 g N /m²) (1年目) 程度の施肥になることは異常ではない。この施肥量は2年目には約 1/2 なり、3年目にはさらに少なくなる。

この時期に利用可能な肥料は多い。ポリオン (Polyon) などの徐放性肥料、たとえば、GreensKote 18-3-18 といった製品であれば、製品重量にして1エーカーあたり500ポンド (56.7 g/m²) を投下すればよい。液肥を使用する場合には 1-1-1 を 0.1～0.3 ポンドN/1000 ft² (1.5-2.5 g N/m²) とする。これは生育適期のもので、短期間で色を出したい場合、特に生育が鈍くて刈かすの量が十分でない時に有効である。液肥は散布車で投与してもよいし、ファーティゲーションでもよいが、必要に応じて、ラベルの希釈率に従って行う。

マルチ

マルチとして、木質繊維、きれいなわら、ペレットなどの有機物質を土壌表面に撒いてもよい。マルチを施すことにより、幼苗の周囲の水分保持や大雨の時の浸食防止に役立つ。マルチとして撒いたわらは3~4週間後に回収（レーキで）するゴルフ場と、そのまま分解させるゴルフ場とがある。播種を行ったエリアはすべてマルチを敷いてよいが、低い刈高を予定している場所ではマルチの量も少なくしておく必要がある。

自動散水システムによる水分管理が可能で、散水タイミングを正確にコントロールできる場合には、マルチは不要である（下を参照）。有機質のマルチの代わりにジオテキスタイル製のブランケットを利用して成功した例もある。こうした資材の使用実績がある場合には、アルファの初期生育にも利用してよいだろう。経験のない人がマルチを使う場合には、有機質のマルチの使用をお奨めする。

初期育成中の刈り込み

成育面に刈り込み機械を載せても物理的なダメージが出ないようになった時点で、すぐに第一回目の刈り込みを行うべきである。草丈が 25mm になるまで刈り込まないのは絶対に良くない。面が均一に芝草に覆われた時点で初回の刈り込みを行う具体的な草丈は：

グリーンの場合は 6~10 mm

ティーの場合は 10~12 mm

フェアウェイの場合は 16~19 mm

グリーンの初回刈り込みの前に、リールを回転させずに歩行型のモアでグリーン全体を踏み固めるとよい。初回の刈り込みでは集草を行い、その後は、集草なしと集草ありとを交互に行い、表面の被覆率が80%になるまでこの方法を続ける。このようにして少量のバイオマスをグリーンに入れることにより、コース開場時の擦り切れやボールマークを少なくすることができる。刈かすがグリーン表面に日陰をつくるなどして生育の障害になるような場合には、グラスファイバー製のムチ（さお）などで均す。

初期育成中の最初の4~6週には、絶対に乗用（3連）のモアは使用してはならない。乗用の機械の使用は、ターフ表面が十分に固くなって芝がめくれなくなるまで待たねばならない。多くのスーパーインテンデントは、最初の年は歩行型のモア以外は使用しない。

刈高を徐々に下げていく（同じ刈高で2回刈り、その次は下げる）。理想的には、初回の刈り込みから6~8週間までに希望する刈高まで下げる。グリーンは、1年目の刈り込みには前ローラはスムーズローラ（フルローラ）を使用する。溝付きローラは使用すべきでない。特に外周には使用しないこと。

砂の粒子形状には特に注意を払うべきである。粒子が丸い砂は移動しやすく、活着中に穴ができたり裸地をつくったりしやすい。角張った粒子の砂はしっかりした培地を作るが、サッチが十分に形成されるまでは若い芝草を傷つけやすい。

初期育成中の目土

刈かすを覆うためと、表面の不陸を滑らかに修正するために薄い目土散布を毎週行う。活着期間中の目土

として、砂と有機物の混合資材の代わりに砂のみの目土としたい場合には、粒径が0.25～0.5 mmの洗い砂を使用する。

初期育成中の散水

播種の前に散水システムを十分に点検しておくことが必要である。播種の前日に十分な散水を行ってグリーン地の地固めを行うとともに、土壌水分を圃場容水量まで引き上げておくが良い。通常は、グリーンへの播種直後の1週間は、それ以降よりも多くの散水が必要になる。

発芽が完了するまでは、1回の散水時間を5～10分程度とし、日中に複数回の散水を時間をあけて行う。毎日現場をよく観察し、散水によって水たまりができたり、播いた種子が流されたりしないように1回の散水を調整する。最新の散水システムを利用できる場合には、スプリンクラー2回転分の散水を毎時間行うのが理想的である。

ベントグラスの初期育成の成否はごく早い時期の散水の良否で決まると言ってもよいくらいである。特に、種子から発芽した幼苗が最初に土の表面に出てくる時が最もデリケートな時期である。この時期は幼苗が体内にほとんど栄養分を持っていない時期であり、わずか1日だけ散水を怠った（雨がなかった）というだけでターフに裸地やムラができる原因となる。発芽後、2週間が経過したころから、徐々に、頻繁な散水から1日1回または2回の散水に切り替えていく。発芽後4～6週間で、グリーンの通常の散水管理に移行できるようになる（下を参照）。

初期育成中のコアリングとバーチカット

通常は、初期育成期間中のコアリングは不要である。土壌表面が十分に落ちていない間に手荒なコアリングを行うとターフ表面を非常に荒らしてしまう。初期育成中に葉身の幅を観察してみて希望よりも幅が広すぎる場合や、芝が薄い場所に向かってほふく茎が伸びていくような場合にはバーチカット（グルーミング）を行うことが望ましい。

アルファのグリーンが開場できる状態になったことを知る目安

筆者のやり方は、グリーンからソッドを切り取って、マット（クッション）層が十分に発達しているかどうかを調べる。また、切り取ったソッドを手で引きちぎってみる。芝をバラすのにそれなりの抵抗が感じられればよい。

管理作業

肥料

年間の栄養素総量は、チッソ 5～20 g/m²、リン 10～15 g/m²、カリ 30-50 g/m² である。予想されるラウンド数が多いゴルフ場や、砂質土壌のグリーンでは上記範囲のうちの量の多い方の数値を採用するようにする。同様に、グリーンの面積が平均よりも小さい場合にも、擦り切れを補うために多めの施肥が必要となる。

他の多くのクリーピング・ベントグラスよりも早春の目覚めが早いので、いわゆる「目覚まし」施肥の効果が大きいと考えられる。ワシントン州からバージニア州にかけて、全米の7つの大学で行われた評価試験では、アルファの緑化を100とした場合、ペンクロスは84%、シーサイドはわずかに63%であった。

アルファは自然な深緑色をしており、急激な色落ちを見せない。従って、施肥のタイミングはターフの色を見て決めるのではなく、刈かすの量を見て決めるべきである。

また、アルファは矮性ベントグラスの系統であるから、刈かすの量は少なめとなる。このことを頭に入れておくことが重要である。特にペンクロスやシーサイドなど、古い種類のベントグラスの栽培管理に慣れている人の場合は意識的に注意する必要があるだろう。

土壌分析は毎年行うようにする。毎年同じ月にサンプリングし、土壌中に不足する栄養素があれば修正する。また毎年夏に葉身分析を行って微量栄養素のチェックを行う。

刈り込み

アルファの一般的な刈高は以下の通りである：

グリーンの場合は 2.5～4 mm

ティーの場合は 4～10 mm

フェアウェイの場合は 6～12 mm

アルファはかなり「手抜きに寛容な」品種ではあるが、刈り込みはきちんと定期的に行うべきである。コンスタントに刈り込みを行うことで、よりクオリティの高いターフとなる。刈り込みの間隔があくと、1回の刈り込みで多くの葉身を失うことになるため、芝草が大きなストレスを受ける。1回の刈り込みで葉身を 1/2 を失った場合、芝草の成長が停止してしまったり、ターフの表面が茎だらけになったりという問題が起きる。グリーンの場合であれば、1週間に 6～7回は刈り込みを行いたい。ターフ面のクオリティを落とすことに異存がなければ、刈り込み回数を減らしてもよい。フェアウェイおよびティーの刈り込み回数（成育期間中）は、1週間に2～3回がベストである。

芝目の発生を防止し、擦り切れや固結が出にくくするため、刈り込みの方向を毎回変えるのがよい。グリーン刈りを乗用の3連モアで行う場合は、外周刈りは隔日で行うようにする。擦り切れと固結を低減するために、外周刈りだけは歩行型のグリーンモアで行うスーパーインテンデントもいる。

トーナメントなどのために速いグリーンを作りたい場合には、短期間であれば刈高を下げてもよい。しかし、グリーンのスピードを速くするというのであれば、ブラシ掛け、バーチカットなど、低刈り以外の方法が良いだろう。グリーンを速くするためには、二度刈り（一日に二回刈る）とローラによる転圧が有効であることが研究で明らかになっている。

バーチカット、グル

アルファは、ペンクロスなどのような横伸び傾向の強い品種ほど頻繁なバーチカットは必要としない。ほ

ーミング、ブラッシング

とんどの場合、月に1回ないし2回で十分である。グルーマを使用することにより、バーチカットの回数をさらに減らすことができるだろう。グルーマは生長の度合いや成熟の度合いを見ながら使用してよい（目安としては週に1~4回程度）。

サッチなどの有機物の除去を目的として深耕タイプのバーチカット機械（グレーデン）を使用するスーパーインテンドントもいるが、筆者としては、サッチ管理はコアリングと目砂で行うのが良いと思う。

ブラシ掛けも良い方法である。春にブラシ掛けを行い、その後は天候や生長を見ながら月に1度程度続けると芝草の密度を増やすことができる。刈り込み機械にブラシを装着するのでもよいが、本格的なブラシ掛けや回転ブラシによるブルーミングには及ばない。

エアレーション、目土

ほとんどのゴルフ場では1年に2回~3回（春、初夏、秋）のエアレーションを行っている。アルファに必要なエアレーションの回数は、他のベントグラスとほぼ同じである。アルファはしっかりした横伸び性質があるため、エアレーション直後から良く回復する。そのため、むくティンであれば 6mm、中空ティンでは 16mm 程度のものを使用することが可能である。むくティン、スターティン、ハイドロジェット（高圧水噴射）もよい。

デボットからの回復についてはオクラホマ州立大学による試験でアルファの回復力が確認されている。ティーの刈高で整備したターフからデボットを6月15日に採取し、4週間で65%の回復を見た。一方シーサイドとペンクロスでは58%の回復率であった。

スーパーインテンドントの経験:「コテージに宿泊されるゲストがいたのですが、当コースのベントグラス試験区でさんざんサンドウェッジの練習をされまして、穴だらけになりました。4週間後に訪問者があり、コースを案内しました。試験区では、ほとんどの草種の区画ではデボットの跡がまだはっきりと残っていましたが、アルファの区画だけは跡が消えていました。実際にはアルファの区画でもまだ多少のへこみが確認できたのですが、デボットそのものは完全に草でおおわれていました。」—（サンドリッジCC、ジム・ローニー；刈高は2.5mm）

目土のやり方はゴルフ場ごとに異なっているが、踏みつけやボールマークなどからできる不陸を修正するのに目砂は重要である。アルファは、毎週行う軽い目土も、月ごとに行う厚目土も問題なく受け入れる。目土の主要な目的はサッチを薄めることにある。目土とサッチとが半々にブレンドされるのが、サッチの増加を止める最短の方法である。

もしサッチの厚みが増加を続けるようであれば、年間のチッソ投与量を減らす、目土の回数を増やす、コアリングの回数を増やすなどの処置を単独または適宜組み合わせで行う。

目土の散布後は、ターフ表面から砂を下へ落としてやることが重要である。これには、マットやブラシを使った擦り込み、散水による落とし込みがある。ターフ表面に残っている大きな砂粒や小石はブラシなどで

グリーンから除去する。

アルファの芽数（密度）は、古い品種の2～3倍である。このため、目土散布の前にグルーミング、バーチカット、グルーヴィング、スライシング、エアレーション、スパイクキングなどを行ってターフ表面から砂が入りやすいようにしておくことが重要である。また、大粒の砂（>0.5 mm）の割合が少ない砂を選ぶことも有効である。

散水

一律な時間割に従って散水するのではなく、「必要に応じて」散水するのがベストである。散水に大きく影響を与えるのは、グリーン構造と天候である。一日の散水量は、その日の気温、風、湿度、日照などにより 1.3～7.6 mm 程度までさまざまに変わる。冷涼な時期には、1日あたりの散水量を 2.5mm 未満として1週間に1度の散水でも十分である。

毎日散水するよりも、1日おきまたは2日おきの散水が好ましい。散水を毎日行うよりも、1日おきまたは1週間に2回とする（1週間の合計散水量は共通）方がクオリティの高いターフになることがテキサス A&M 大学の研究で確認されている。

成長調整剤 (PGR)

アルファは、プリモマックス（トリネキサパックエチル）、プロキシ（エテホン）、トリミット（パクロブトラゾール）によく応答する。実際のところ、PGRを使用すると、アルファの緑色がより深くなり、密度も増加する。

また、PGRの使用で、ボールマークからの回復が早くなる。ペンシルバニア州立大学の研究では、ボールマークからの回復をチッソ施肥で促進しようとするするとグリーン速度が落ちる欠点があるが、PGRとバイオスティミュラントを使うとチッソに頼らずにボールマークからの回復を促進できることが分かった。

スズメノカタビラ (*Poa annua*) の抑制

アルファは、スズメノカタビラと競合できる品種として開発された。ジャックリン・シード社では、ベントグラスの全系統についてカタビラとの競合試験を行っている。カタビラとの競合性のない株はすべて廃棄される。アルファの元になった芝草系統はすべて優れたカタビラ駆逐性を持つものである。実際に育成してみると、年々カタビラを駆逐していくのが観察できる。

アルファのカタビラ耐性については、ウィスコンシン大学の O.J. ノエール・センターがフェアウェイの刈高で確認済みである。フェアウェイでカートを頻繁に使用するというシミュレーション条件下で、アルファはカタビラの侵入率を6%未満に抑えるという実績を見せた。ペンクロスはアルファに比べて2倍の侵入を受け、シーサイドおよびベルベットベントグラスでは侵入率が3倍であり、コロニアルベントグラスでは4倍であった。

パクロブトラゾール（トリミット）を使用すると、アルファのカタビラ耐性がさらに効果を上げ

る。初夏を通じて、ラベルに記載されている高濃度側の薬量で、4～6週間間隔で使用すると、アルファに良い効果が出る。エトフメセート（プログラス）とビスピリバックナトリウム（ベロシティ）も、ラベル記載の薬量およびタイミングでアルファに安全に使用することができる。

スーパーインテントの経験:カートランドCC（オハイオ州クリーブランド近郊）では、カタビラに囲まれたティーでアルファを育成した。現在までティーにカタビラは見られない。また、アルファはティーから周囲のカタビラの中へ侵入をしている。

既存のターフにアルファ種子をインターシードする場合

インターシードとは、既存のターフに新しい草種を導入する手法である。実際にプレーに使用しているグリーンでインターシードを成功させるのは極めて難しい。これまでは、インターシードをしても発芽した幼苗が既存の芝草との競合に打ち勝つことができないために、ほとんどのゴルフ場にとってインターシード価値のないものであった。第一回の試験では、アルファはインターシードに利用できる種子として最高の品種となっている。インターシードの手法とコツを分かりやすく説明する別資料を現在制作中であるが、以下は、既存のターフにアルファをインターシードする場合の2種類の手法について簡単に解説したものである：

1年に 1～3 回の播種を行う。播種の方向は毎回変える。1回の播種に使用する種子の量は、10～20 g/m²とする。ジャックリン・シード社の研究では、播種量を5g から 10g に、また 10g から 20g に増やすごとに活着率（アルファが被覆した面積の割合）が2倍になることが確認されている。

最も良い利用方法は、温かい時期を狙ってカタビラに対してインターシードを行うという方法である。バーチカット、エアレーション、スリットなどの手法でターフを開き、播いた種子が土に接触するように準備する。準備のできたターフに播種を行い、目土を散布し、マットかレーキで刷り込みを行う。

別の方法として、成育シーズンを通して2週間ごと（グルーミング、スパイクング、目土の散布を行った時）に少量の播種を続ける。この方法は、グリーンに定期的にベントグラスの種子を入れることになるので、いわゆる「休眠中の大量のカタビラ種子」が問題となるグリーンに適している。播種には、ガンディー（Gandy）のチップスパイカを利用することも可能である。少量播種用にホッパーを絞り込んで使用する。

スーパーインテントの経験:バルタスロールGCのマーク・クーンズ氏による少量多回数インターシード体験。2週間ごとに55～110g の種子を播いた。播種に使用した器具はスコッツ（Scotts）のドロップスプレッダ。ゲートを閉じて使用（ベントグラスの種子がちょうどよい量で漏れる！）

この商品概況報告書は、あくまでも一般的なガイドラインを提供するものです。あくまでも良い管理プログラムを作るためのスタート情報としてお使いください。
アルファ・クリーピング・ベントグラスは特許申請中の品種です (US patent 10/872,695) この情報の無許可頒布を禁止します。